

ティーチング・ポートフォリオ

学科：児童教育 氏名：小山久美子

(記入日：2023年 9月 19日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

<2023年 前期>

- 「小学校英語指導法」(児童教育学科 2年 前期 必修科目 2単位)
- 「小学校英語」(児童教育学科 1年 前期 必修科目 2単位)
- 「言語学入門(1)」(国際英語学科 1~2年 前期 選択必修科目 2単位)
- 「英文法Ⅱ」(国際英語学科 2年 通年 選択必修科目 2単位)
- 「英語学特講」(国際英語学科 3~4年 前期 選択必修科目 2単位)
- 「言語コミュニケーション特講Ⅲ」(国際英語学科 3~4年 前期 選択必修科目 2単位)
- 「英語科教育法Ⅰ」(国際英語学科 2年 前期 教職必修目 2単位)

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

教職関連科目については、学生に小学校、中学校、高等学校で英語を指導できる知識と指導技術を身につけさせるためである。

国際英語学科専門科目では、学生に英語の構造を理解させ、言語学全般についての基礎的知識、さらに専門的な英語史・国際英語として英語の知識を習得してもらい、自分で見つけたテーマを探求し論文を書けるようにさせるためである。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

- ・「小学校英語指導法」「英語科教育法Ⅰ」では、理論と実践(模擬授業)を指導した。「小学校英語指導法」では、毎回授業の最後にクラスルーム・イングリッシュを学習し、実践で使用できるようにした。両授業とも、模擬授業では、最後に生徒役の履修生と意見交換し、教員が講評した。
- ・「小学校英語」では、英語の基本的知識として音声学、英文法、英語児童文学についてCDやパワポを用いて指導した(エビデンス1)。
- ・「言語学入門(1)」では、パワポを用いて授業し、最後にブリーフ・レポート(リアクション・ペーパー)を書いてもらい、コメントを付して次の授業時に返却した(エビデンス3)。
- ・「英文法Ⅱ」「英語学特講」では、パワポ(エビデンス1)を用いて指導した。「英文法Ⅱ」では、説明後に練習問題を解いた。(エビデンス3)。

4 成果 (どうだったか：結果と評価)

- ・「小学校英語指導法」では、学習指導案を書き（エビデンス 4）、TT で模擬授業を行うことができた。全員がオール・イングリッシュで模擬授業をした。これは、クラスルーム・イングリッシュの徹底と授業の初めに英語の歌を歌うなど英語に慣れるよう工夫した結果でもあるので、今後も続ける。
- ・「小学校英語」では、小学校英語の指導に必要な英語の基礎知識について説明したが、全体として、文法が苦手であることが分かったので（エビデンス 3）、今後は説明に十分時間をかけ、練習問題を増やす必要がある。
- ・「英語科教育法 I」では、学習指導案を提出し（エビデンス 4）、模擬授業を行うことができた。中学校を見学した後の模擬授業は、見学した授業を参考に、テンポ良く、メリハリのある授業ができた。
- ・「言語学入門(1)」では、ブリーフ・レポートを記入することで、要点をまとめる練習をできたが、書く力にばらつきがみられたので（エビデンス 3）、後期も続けてレポートの記述を続ける。
- ・「英語学特講」は内容量が多いため、パワポの資料も多くなってしまった。説明に時間をかけ、学生が理解できなかった箇所は、再度説明するようにする。
- ・「言語コミュニケーション特講Ⅲ」は、各時間テーマを決め、ディスカッション、発表をしながら授業を進めた。学生の理解も良く、ことばへの関心が高まった。（エビデンス 2）

5 今後の目標（これからどうするか）

学生の授業内容を十分に理解できるよう、説明を丁寧にしていくことを心がける。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1. パワーポイント資料（非公開）
2. 2023 年前期授業評価アンケート（非公開）
3. 試験、ブリーフ・レポート（非公開）
4. 学習指導案（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

学科：児童教育 氏名：小山久美子

(記入日：2024年 2月 29日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

<2023年 後期>

「言語学入門(2)」(国際英語学科 1~2年 後期 選択必修科目 2単位)

「言語学演習(3)」(国際英語学科 2年 後期 選択必修科目 2単位)

「英語科教育法Ⅱ」(国際英語学科 2年 後期 教職必修目 2単位)

「卒業研究」(国際英語学科 4年 通年 必修科目 6単位)

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

教職関連科目については、学生に中学校、高等学校で英語を指導できる知識と指導技術を身につけさせるためである。

国際英語学科専門科目では、学生に英語の構造を理解させ、言語学全般についての基礎的知識、さらに専門的な語用論の知識を習得してもらい、自分で見つけたテーマを探求し論文を書けるようにさせるためである。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

- ・「英語科教育法Ⅱ」では、資料を配付し、パワポを用いて説明した。各領域に関して、生徒役に対し模擬授業を行い、模擬授業後に履修者でディスカッションし、教員が講評した。
- ・「言語学入門(2)」では、資料を配付し、パワポで説明し、授業後にブリーフ・レポートを書かせ、提出させた。回収後、コメントを付して次の授業で返却した。
- ・「言語学演習(3)」では、意味論・語用論の各項目について説明をした後、各自が自分でその項目についての例文作成や検証を行い、発表してもらい、全員でディスカッションした。
- ・「卒業研究」では、各自が研究テーマに沿って、先行研究の分析、言語資料の分析・考察をした。中間発表での質疑応答・講評を参考に検討し、完成に至った。

4 成果 (どうだったか：結果と評価)

- ・「英語科教育法Ⅱ」では、前期よりは、授業の位置づけを理解でき、学習指導案の作成も的確に出来た。(エビデンス1、2)
- ・「言語学入門(2)」では、前期よりはゆっくり展開できた。(エビデンス1)。

・「言語学演習(3)」では、ディスカッションをしながら進められ、学生も他の学生の意見を知り、自分と比較することができ、有意義だった。(エビデンス1)

5 今後の目標 (これからどうするか)

・パワーポイントを使用して、学生に資料を配付しながら授業を進めていったが、説明が早くなることもあり、学生が追いついていないことがあった。説明しながら授業内容を進める場合には、全員がついてきていることを十分確認しながら進めるようにしたい。

・模擬授業に関しては、学習指導案の添削をしてから、模擬授業を実施したが、生徒役が一人だったこともあり、実際の授業(30人クラス)とかけ離れていた。テンポ良く進めていたが、実際は、そのようにいかないことが予想されるため、もっと出来ない役をするなどの工夫をしていきたい。

6 エビデンスとなるもの (資料の種類などの名称)

1. 2023年後期授業評価アンケート (非公開)
2. 学習指導案 (非公開)

ティーチング・ポートフォリオ

加藤 美由紀

(記入日：2023年9月12日)

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

小学校教員免許科目、学科科目、共通教育科目を担当している。

【免許に関する科目】

生活（1年前期選択必修科目 2単位）

生活科教育法（2年前期選択必修科目 2単位）

教育実習演習（事前・事後指導）（3年選択必修科目 1単位） 共同担当

【学科科目】

教職専門演習（3）（3年次前期選択科目 2単位）

児童教育演習（3年次必修科目 4単位）

卒業研究演習（4年次必修科目 4単位）

【共通教育科目】

情報リテラシー（1年次前期必修科目 2単位）

生命の科学（選択必修科目 2単位）

人体の科学（選択必修科目 2単位）

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

「生活科」「生活科教育法」「教職専門演習（3）」「児童教育演習」「卒業研究演習」については、小学校教員免許を取得するために必要な生活科・理科に関する資質・能力を身につけることを目標としている。

「情報リテラシー」については、情報の活用、情報セキュリティに関する知識、情報モラルを身に付けることを目標としている。「生命の科学」「人体の科学」については、生物学に関する科学的知識をもとに、健康、環境などの日常生活の中での問題についてある程度考える姿勢を身につけることを目標としている。

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

「生活」では、生活科創設の経緯を踏まえ、生活科の意義と各教材の目的を考える実習を行った（エビデンス1）。「生活科教育法」については、指導と評価の一体化を見通した学習指導案の作成、模擬授業を行う機会を設けた（エビデンス1）。

「情報リテラシー」については、身の回りのデータに基づく表計算の練習、発表資料の作成、情報セキュリティや情報モラルに関する事例を通じた理解など、情報リテラシーを身に付ける支援を行った（エビデンス 1）。「人体の科学」においては、生活習慣病や食習慣・運動習慣を取り上げることで健康の大切さに意識を向けさせる授業を行った（エビデンス 1）。「生命の科学」においては、生物学に関する科学的知識の説明とともに、生物多様性保全などの環境問題や、ゲノム編集などの遺伝子技術についての現状を示し、環境問題や遺伝子技術について学生に考察させる機会を設けた（エビデンス 1）。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

「生活」については、教材作製を通して、学生は、生活科の意義や用いる教材の意味を理解しようとしていた（エビデンス 2,3）。「生活科教育法」については、模擬授業の立案・実施を通して、学生は、低学年の児童への教育を考慮に入れた授業構成について検討していた（エビデンス 2, 3）。

「情報リテラシー」については、情報セキュリティや情報モラルに気をつける姿勢が見受けられた（エビデンス 2, 3）。「人体の科学」では日常の生活習慣と健康について、「生命の科学」では生物多様性保全の問題やゲノム編集技術応用食品等について考える姿勢が見られた（エビデンス 2, 3）。

5 今後の目標（これからどうするか）

「生活」「生活科教育法」では、低学年児童に対する授業構成について考える機会をさらに設け、教師の視点へ移行していく過程を示しながら、学生が、低学年教育としての生活科の授業構成を考える支援を行う。「情報リテラシー」については、情報モラル教育及び著作権教育を事例を紹介しながら学習を進展させる。「人体の科学」と「生命の科学」については、今後も目標に沿って学習を進め、健康や環境問題などを自らの問題として捉えられるようにヘルスリテラシーや科学リテラシーを高める機会を引き続き設定したいと考えている。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1. シラバス（公開）
2. 最終レポート（非公開）
3. 各回の提出課題（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

加藤 美由紀

(記入日：2024年2月19日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

小学校教員免許科目、学科科目、共通教育科目を担当している。

【免許に関する科目】

理科 (1年次後期選択必修科目 2単位)

理科教育法 (2年次後期選択必修科目 2単位)

教育実習演習 (事前・事後指導) (3年次選択必修科目 1単位) 共同担当

【学科科目】

児童教育演習 (3年次必修科目 4単位)

卒業研究演習 (4年次必修科目 4単位)

卒業研究 (4年次必修科目 2単位)

【共通教育科目】

生命の科学 (共通教育 2単位)

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

「理科」「理科教育法」「児童教育演習」「卒業研究演習」については、小学校教員免許を取得するために必要な理科に関する資質・能力を身につけることを目標としている。

「生命の科学」については、生物学に関する科学的知識をもとに、生物多様性保全、遺伝子技術などの日常生活の中で取り上げられる事柄についてある程度考えることができる姿勢を身につけることを目標としている。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

理科教育に関する実践力を育成するために、学生が主体的に実践できるように工夫している。「理科」については、毎時間実験・実習後、レポートを提出させることで、探究の過程の習得を試みている。理科における ICT の活用については、デジタル教科書の使用や、動画や書画カメラを通した演示実験の提示方法、タブレット PC を用いたプログラミング・ビジュアルプログラミング言語によるプログラミング教育を学習する機会を設けた。「理科教育法」については、理科の見方・考え方を前提として、学生が実験・実習の模擬授業を構成する過程や、

実験結果から考察を導く指導法について支援を行った。「児童教育演習」「卒業研究演習」では、各自の教科教育に関する問題意識に沿って課題を解決できるように、ある程度のフォーマットを提示し、纏める力を育成できるよう努めた。

「生命の科学」においては、生物学に関する科学的知識の説明とともに、生物多様性保全などの環境問題や、ゲノム編集などの遺伝子技術についての現状を示し、環境問題や遺伝子技術について学生に考察させる機会をほぼ毎時間設けた。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

「理科」については、毎時間レポートを提出させる中で、主体的に取り組む姿勢を身につけた学生が見られた（エビデンス3）。「理科教育法」については、複数班分の実験の準備、安全指導、実験方法、結果、考察、後片付けの指導についての流れを学生が習得した。しかし、実験結果から考察を導き出す指導法については、今年度は発問の大切さに気付く段階まで到達した学生が複数見られたが、発問内容については課題が残された。（エビデンス2,3）。

「児童教育演習」「卒業研究演習」については、各自のテーマに関する文献を集める点については課題が見られるものの、文献を読み、まとめることについては粘り強く努力する姿勢が見られた（エビデンス2,3）。

「生命の科学」については、日常生活で目にする生命科学の問題についてメリットデメリットの両面から考えようとする姿勢が見られた（エビデンス2,3）。

5 今後の目標（これからどうするか）

「理科」については、実験・実習及びレポート作成による探究する力、考察する力の修得を目指す。「理科教育法」においては、実験結果から考察を導く発問に必要な基礎学力や描画法などの指導方法を示し、現段階よりもステップアップした発問方法を習得するための機会を設ける。「児童教育演習」「卒業研究演習」については、学生が主体的に調べる力、目的に沿って研究内容を構成する力を身につけるために研究内容を検討する時間を多くとるように努める。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1. シラバス（公開）
2. 提出レポート（非公開）
3. Teams 課題配信への提出課題、実験結果のレポート（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

(記入日：2024年 1月9日)

児童教育学科 田中 聡

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

- ・卒業研究演習 (4年 通年 必修 4単位)
- ・算数 (1 - 4年 通年 選択必修科目 4単位)
- ・学校経営論 (学校安全を含む) (3年 前期、後期 選択必修科目 2単位)
- ・総合的な学習の時間の指導法 (3 - 4年 前期、後期 選択必修科目 2単位)
- ・教育実習演習 (事前・事後指導) 中高 (3年 後期 選択必修科目 1単位)
- ・教育実習演習 (事前・事後指導) 中 (4年 通年 選択必修科目 1単位)
- ・教職専門演習 (2) (3年 前期 選択必修科目 2単位)
- ・算数科教育法 (2 - 4年 後期 選択必修科目 2単位)
- ・教職インターシップ^o (事前・事後指導) (3 - 4年 通年 選択必修科目 4単位)
- ・学校体験活動 (1 - 3年 通年 選択必修科目 4単位)

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

- ・自ら課題に向き合い、他者と協働しながら主体的に解決策に取り組むことにより、感謝の心と奉仕の精神を育み、自立した人材を育成するため。
- ・教職に対する意欲を引き出し、教員に必要な基礎的、基本的な知識・技能を習得し、活用できるようにするため。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

- ・事前学修の課題を明確にし、事前に取り組んだものを授業内で共有し、新たな疑問や課題に向き合いながら問題解決型の授業を進めてきた。各学年、領域の目標や学習内容の系統について学習指導要領を基に調べ、単元計画やPPシートを作成し、プレゼンを行った。(算数)
- ・事前学修として模擬授業のための素材づくりや細案、略案、板書計画等の作成を行った。必要により事前学修の個別指導を面談やリモートで行った。模擬授業の様子をビデオ撮影し、事後学修での振り返りを行った。毎回、児童役となった学生全員で評価票を記入し、模擬授業者に提出した。(算数科教育法)
- ・実際の学校現場の様子や先輩の実習の様子をビデオ視聴できるようにした。教育実習での具体的な課題を提示し、ディスカッションする場面を設定した。毎

時間のリアクションペーパーを事後学修の中に盛り込んだ。(教育実習演習)

- ・ 実際の教採に合わせた模擬授業や各自が収集した時事問題のプレゼン、集団討議を授業の導入で実施した。事前学修として、各自治体の教採の傾向や過去問題の傾向を調査し、ディスカッションやプレゼンを行った。(教職専門演習)
- ・ 全体計画、年間計画、単元の指導計画、本時の指導計画等を事前に作成し、4人グループや全体で共有し、課題や成果について話し合った。(総合的な学習の指導法)
- ・ 経営の基本について学校現場の課題を例にしながら、どう取り組むべきかを思考し、グループ内で考えを深めた。(学校経営論)

4 成果（どうだったか：結果と評価）

- ・ 少人数（20名程度）の授業では、teamsの活用により、授業中の個別の意見や質問を取り上げやすくなった。個別対応が取れることで学生の意欲が高まり、主体的な参加型の授業となった。
- ・ 事前学修での課題⇒授業内でのプレゼン、ディスカッションといった流れが、1時間1時間の授業のねらいを学生が理解し、振り返るのに有効だった。
- ・ 学校現場の具体的な指導場面のビデオ視聴や外部講師の導入は、学生の課題意識を明確にし、教職に向かう意欲の向上に大きく寄与した。
- ・ 1時間の授業課題を明確にし、問題解決型にすることで、学生に授業の意図をわかりやすく伝えることができ、学生も積極的に授業に参加できた。特に、事前学修が充実してきた。
- ・ 振り返りシートや授業評価等を活用することで、学生の「わかった」「できた」というメタ認知を創り出せた。教職に関する具体的な知識技能を習得しているという実感を持たせることができた。
- ・ どの授業も授業評価の各項目で「そう思う」が多かった。特に教育実習関係の科目は、学生にとっても主体的に学ぶことができたようである。

5 今後の目標（これからどうするか）

- ・ 卒業後教師になるという目標がはっきりしている学生以外でも、人としてどう課題に取り組むべきかを考えられるように、それぞれの「学び」の目標をさらに明確にし、取り組むべき学習課題の設定を適切に行っていききたい。
- ・ ICT活用が必須となるので、現在学校現場で活用されている実物投影機や

大型テレビ、プロジェクター等に加え、タブレット端末の活用も模擬授業の中で取り上げていきたい。

- ・ ワード、エクセル、P P等のアプリの活用を積極的に行い、作成スキルの向上を目指すとともに、プレゼンスキルについても授業の中で触れながら向上を図っていきたい。
- ・ 教員採用選考に対する取り組みを組織的に行うことができたが、教職専門演習等の授業との関連や教員同士の横のつながりを強くしていきたい。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- ① 振り返りシート、板書計画、単元の指導計画、学習指導案、レポート等
- ② 「彼方」（校長通信・指導室長だより）、テキスト（シラバス記載）
- ③ 外部講師、学校現場での実践ビデオ、実習生の精錬授業のビデオ

ティーチング・ポートフォリオ

児童教育学科： 氏名：山口 祐子

(記入日：2023年8月21日)

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

学校体験活動（2～4年次通年選択必修2単位）

教職教養演習（3）（3～4年次後期選択必修2単位）

教育実習演習事前・事後指導（3～4年次通年選択必修1単位）

教育実習（3～4年生通年 選択必修4単位）

学校経営論（学校安全を含む）／教育行財政（2～4年次前期選択必修2単位）

総合的な学習の時間の指導法／教職総合演習（3～4年次後期選択必修2単位）

教職実践演習（小学校）（4年次後期選択必修2単位）

児童教育基礎演習（2年生 前期必修2単位）

教職教養演習（2）（4年生前期選択必修2単位）

教職専門演習（2）（3年生前期選択必修2単位）

児童教育演習（3～4年次通年必修4単位）

教職インターンシップ（事前・事後指導）（3～4年次通年選択必修4単位）

教育実習演習（小 事前・事後指導）（4年次通年選択必修1単位）

教育実習（小）（4年次後期選択必修1単位）

卒業研究演習（4年生通年必修4単位）

卒業研究（4年生後期必修2単位）

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

- ・「何を学ぶか」「どのように学ぶか」そして、「何ができるようになったか」を実感できるシラバスを作成し、主体的に学び続けられる学生を育てる。
- ・教員採用選考を通過し、教壇に立つために必要な基礎的・基本的事項を身に付けさせる。
- ・学校体験活動や教育実習を通して、体験することによって現場の雰囲気や取り組み方を肌で感じ、教師になる使命感や自覚を高める。
- ・実務家教員として、創意工夫しながら、現場ですぐ生かせる指導を行う。

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

- ・講義の見通しを持たせる。シラバスを配付し、計画的・継続的に外部講師を要請したり、学校参観等外部に出での体験をさせたりした。
- ・「講義」「体験」「課題への取組（個・グループ）」「発表」を適宜取り入れる。基礎基本は講義形式で行い、そこから探究すべき課題を設定する。情報収集や協働的な学びを積み重ね

ながら、個やグループで発表させる。

- ・「評価者」としての力を付けるために、発表時に評価をさせている。また、どの時間においても「振り返り」を大切にしている。教育実習演習では、指導案作成・模擬授業を行い、担当者と学生の評価（1人 A4 1枚と指導案の改善するところに「朱」を入れて）をフィードバックした。
- ・「学校経営論」は、「1回から15回の資料と振り返り」・「はじめに」・「15回の講義を受けて～小学校教員になるために心に留めておくこと」・「終わりに」をポートフォリオ（A4のファイル使用）ファイルを作成した。
- ・教職専門演習（2）では、事前学修のテーマに、教育課題をあげ、14回毎回 A4 表裏のレポートを持参させ、協働的に学ばせた。その後、集団面接の練習を行った。
- ・教職教養演習（2）は、4年生の集団面接を行い、3人の教員で全力で臨み、学生に力を付けさせた。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

- ・振り返りや評価カードでは、学生の真剣な取り組みと豊かな感性を感じた。「体験」や「主体的・対話的で深い学び」を重ねる中で、成長する姿を感じた。
- ・事前学修には丁寧に取り組む学生が多く、力を伸ばした。
- ・課題や振り返り等、期日を守って提出できない学生がいる。その対応について考えさせられた。

5 今後の目標（これからどうするか）

- ・教師になることの「厳しさ」、社会や教育の変革の激しさや、それに対応する教師力が必要なこと等を伝えていきたい。併せて、教師という職業は他では味わうことができない「やりがい」があるということを話していきたい。「各科目」・「体験や実習」・「教員採用選考に向けて」・「卒業研究」、それぞれに「目標」をもたせ、自分なりの努力を「可視化（記録をつける）」させ、達成に向けて努力させていきたい。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- ・振り返りシート、評価カード、指導案、板書計画、体験レポート等
- ・パワーポイント資料
- ・学生が作った成果物
- ・学生が作った「ポートフォリオ」

ティーチング・ポートフォリオ

児童教育学科 : 氏名 横山 悦子

(記入日: 2023年8月21日)

1 教育の責任 (何をやっているか: 担当科目)

- 国語 (1年次通年選択必修 4単位)
- 国語科教育法 (2年次前期選択必修 2単位)
- 国語科教育法Ⅰ (2~4年次前期教職科目 2単位)
- 国語科教育法Ⅱ (2~4年次後期教職科目 2単位)
- 児童教育演習 (3年次通年必修 4単位)
- 卒業研究演習 (4年次通年必修 4単位)
- 教職専門演習 (1) (3年次後期選択必修 2単位)
- 教職教養演習 (2) (4年次前期選択必修 2単位)
- 教職教養演習 (4) (4年次前期選択必修 2単位)
- 教職実践演習 (中・高) (3年次後期選択必修 1単位)
- 教育実習演習 (小事前・事後指導 4年次通年教職 1単位)
- 日本語と表現 (1) (1~4年次選択必修前期後期各 2単位)

2 理念 (なぜやっているか: 教育目標)

- ・予測困難な時代を生き抜くために必要な力を『感性』と捉え、共に磨き、鍛えることで豊かな人間性を養い、たくましく生きる力を育む。
- ・言葉や文芸、文化に対する興味・関心を高め、教育実践をリードできる能力と行動力、協調性を育む。

3 方法 (どのようにやっているか: 実践の工夫)

- ・どの科目も半期・年間の「ゴール」を明確にし、全体を俯瞰できるようにしている。毎時間、授業の始めに「ねらい」を提示し、主体的・対話的に学び取らせ、終わりには「まとめ」を行い、学習したことを整理させている。
- ・毎時間、「リフレクション」を行い、自己の成長に気づけるようにしている。リフレクションシートは提出させ、必ず教師のコメントを入れる。どんなに小さいことでもできたことを認め、モチベーションが上がるようにしてきた。自信を持たせることで、意欲につなげていく。
- ・講義は得た知識がそのまま終わらないよう、様々な体験を交えながら話したり、講師を招聘したり柔軟に活用できるようにしている。
- ・日本語と表現においては、『感性を磨く』を合言葉に、「俳句」「絵手紙」「ポップ広告」などを作ったりした際、よい作品には「賞」をつけて展示した。こ

れは、序列をつけるためではなく、心を耕すために実施している。芸術作品は点数がつかない分、良いものを感じ取らせる必要がある。（日本語と表現）

- ・国語全般においては、主に学習材の分析と授業デザインの理論や方法の定着を行ってきた。その際、「楽しい授業」を追究し、授業台本を書いたり協働的に学んだりして、現場ですぐに活用できるよう工夫した。
- ・国語科教育法では、指導案や板書計画を作成し模擬授業を実施してきた。事前学修として、学習指導案を10日前に提出させ、一人一人と事前に向き合い、「よりよい指導案・授業」に向けて個別指導をしてきた。
- ・授業後、2分間「ほめほめシャワー」の時間を設けよかった点だけを伝え合い、課題については、後日、※「評価カード」に記入し授業者に手渡している。
※A4一枚の授業記録。授業のポイント・よかったところ・改善点などを記したものの。具体的に伝えるために、模擬授業の写真（板書や授業の様子）を添付。モチベーションが上がるよう作成している。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

- ・リフレクションシートの内容より、対話することで深い学びができ、自分の成長を自覚できたという記述が多く見られた。
- ・「事前の個別指導」、「評価カード」、「ほめほめシャワー」の実践により、自己肯定感が上がり授業中の発表や態度が意欲的になってきている。
- ・「俳句コンクール」や「絵手紙」「ポップ広告」などの展示を見に来る学生が増えた。賞をもらった学生は自信となり、もらえなかった学生が再チャレンジする姿があった。

5 今後の目標（これからどうするか）

- ・「感性を磨く」
予測困難な時代を自分で判断し決断し力強く生き抜くために、『感性を磨く』を合言葉に、豊かな人間性を養っていく。そのために、全ての授業科目を通し心の教育を実践していく。
- ・「個」を大切にする。
教育実践をリードできる資質・能力を育むための土台となる、自己肯定感をあげる。可能性が最大限に引き出されるよう支援していく。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- ・リフレクションシート、評価カード
- ・学習指導案、板書計画、プレゼン資料、パワーポイント等
- ・作品（俳句・絵手紙・ポップ広告・EC・プレゼン資料・小論文・随筆等）

(記入日：2024年2月27日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

学部

介護等体験 (2年通年選択必修科目1単位) (児童教育・中高・目白)

特別支援教育 (中高・児童教育3・4年前期必修科目2単位) (目白・3年後期必修2単位)

進路指導・キャリア教育 (前期・後期 教職科目 各2単位) (児童教育・中高・目白)

大学院

特別支援教育の理論と方法 (講義 2 半期 1・2 選択必修科目2単位)

特別支援教育実践法 (演習 半期 1・2 選択必修科目2単位)

特別支援教育実践演習Ⅰ (演習 半期 1・2 選択必修科目2単位)

特別支援教育実践演習Ⅱ (演習 半期 1・2 選択必修科目2単位)

学校経営特論 (講義 半期 1・2 選択必修科目2単位)

※ 本年度 担当している大学院は開講していない

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

私の教育理念・目標

学生が教職の現場に立った際、指導上、特別な支援を必要とする児童・生徒に対して共感的な支援ができるように、指導の基本的な姿勢と基礎的な知識を身につけさせることである。また、そうした児童生徒への支援方法を自ら工夫し、他の職員と協働して支援体制を構築することができるようにすることである。

また、理論を理解するために実際の教育現場に学生自身が足を運び、現場での経験を重ね、その経験を大学で他の学生と共有した上で、講義において理論として整理し、習得することができるように授業を進めることである。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

学生が大学で学修する理論や方法を自分のものとして定着させるために、教育現場での体験・経験と大学での講義の往還教育を大切にしている。

介護等体験(事前・事後指導)では現場で実践している社会福祉施設の施設長や特別支援学校校長による実地に即した事前指導を行う。

授業では先輩達の体験記などを資料として実際の体験に基づく注意点や介護のポイントを指導し、具体的な授業を心がけている。また、授業の中に、近隣公民館でおこなっている障害者の生涯学習講座への参加を複数回ボランティア体験させ、予め障害者との接し方に

ついて学ぶ経験を大切にしている。また、施設での介護等体験が終了した者から施設での様子や成果を全体に発表している。また事後指導はそれら経験をレポートにまとめさせる都同時にパワーポイントで発表資料を作成し、全体発表し、この経験を全体で共有することで経験の定着を図っている。目白の授業においては介護等体験

特別支援教育では特にインクルーシブ教育システムの構築に向けての基礎的な知識を学ぶために、小学校における具体的な支援を想定して国立特別支援教育総合研究所のインクルーシブ教育システム構築支援データベースを実際に使用しながら、具体的な支援方法についての理解を進めている。また、具体的な支援の例では、これまでの教育現場での実例を示しながら解説することで、より理解しやすいように心がけている。また、途中では教材としてDVDの視聴を行い、障害の特徴や指導について具体的なイメージが持ったうえで、授業の内容を理解しやすいように工夫している。

進路指導・キャリア教育では進路指導をキャリア教育ととらえて、キャリア発達理論を学びながら、実際に自分自身のキャリアについての検査を行い、自らのキャリアについて考察を加えることを大切にしている。児童教育の学生については、特に小学校段階でのキャリア教育の授業の実践を各自に構想させ、キャリア教育をそれぞれの学年で実施するための授業構想を作成し、相互に発表する事を大切にしている。中高、目白の授業においてはキャリア発達論を中心にしながら自己のキャリア形成について分析する経験を重ね、自己理解を通して、中学・高校生のキャリア発達に即した指導に資するために演習を多用している。

すべての授業において毎回、授業のプリントを作成し、それに基づいたパワーポイント資料を作成し授業中に示しながら授業を行っている。主体的に学習を進める機会を多くするために、課題に対してグループでの討議や発表を複数回行っている。課題への取り組みでは自が考える時間に加えて、学生研究室などを利用して、授業時間以外にも学生相互が協力・相談し最終的に課題を完成するように指導をした。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

介護等体験・教育インターンシップでは介護等体験・教育ボランティアを経験した学生がその都度体験レポートをまとめ、発表を行うことで自らの体験を振り返ることを繰り返し、回を重ねるごとに、児童生徒の前での対応が向上し、教師としての自覚を高めることができた。（エビデンス1）。

この授業に関係しておこなったボランティア体験。（エビデンス1）

進路指導・キャリア教育においては授業構想案・指導案の作成や、発表用のパワーポイントづくり（エビデンス2）を通じて発表の質を高めることができた。

5 今後の目標（これからどうするか）

介護等体験では学生をボランティアとして地域の公民館のボランティアと共催で障害者

のための生涯学習講座の学習支援を行っているが、公民館との連携が深まり、公民館長（元小学校校長）からの指導も積極的に取り入れ、効果を上げている。これからも、内容の充実を進めていきたい。また、現場体験と講義との往還教育を深め、より実践的・経験的な授業を行っていきたい。

進路指導・キャリア教育では映像資料に加えて、具体的な内容についてのパワーポイント資料を作り、視覚的な教材を多く用意するようにしている。また、授業中にスマホ等でネットを検索し、画像を見せるなどして、具体的なイメージを持てるようにしているが、さらに

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1 体験レポート・発表資料・リアクションペーパー（非公開）
- 2 授業構想案・指導案・パワーポイント資料

ティーチング・ポートフォリオ

奥田 順也

(記入日：令和6年2月29日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

児童教育学科科目：「音楽科教育法」(2年次後期必修科目2単位)

「音楽」(1年次後期選択必修科目2単位)

「児童教育演習」(3年次必修科目4単位)

「卒業研究」(4年次必修科目4単位) など

(他、幼児教育学科科目「弾き歌い演習」など)

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

児童教育学科の科目においては、学習指導要領にもとづき、小学校音楽科の授業を実践できるようにするために、音楽科に必要な知識、技能、音楽表現および実践的な指導法を習得することを目標としている。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

「音楽」では2年次に履修する「音楽科教育法」の基礎となるよう、小学校音楽科の領域分野の学習内容について、学習指導用の概要の理解を目的とした。特に「三つの柱」を意識することを重視した。

また、児童の視点とともに、リコーダーの演奏などの音楽活動に関する演習も行った。とりわけ、鑑賞の学習については、ICTの活用として、事前事後学習で実施するteamsを介した鑑賞の授業課題を設定した。具体的には、学生の興味のある楽曲(J-popなどを含む)を任意で一曲選び、選択した楽曲の音源(youtubeのURL)を紹介する。その際、URLとともに音楽科の授業において欠かすことのできない〔共通事項〕をもとにした楽曲の解説文をteamsに投稿する。投稿した学生以外の学生は、これらを視聴した感想をformsに記述する。全員でその感想を共有できるよう、担当教員が感想の一覧をPDFで作成し、teamsに投稿する。これらの手順を毎週、順番に担当することで、音楽科の重要となる〔共通事項〕への理解を計った。

「音楽科教育法」では小学校音楽科の模擬授業を実施することを目指し、1年次に学習した学習指導要領の理解を深めた。また、学習指導案の作成の仕方と各領域分野の授業づくりについて学んだ。そのための学習指導案の作成の仕方については、小学校音楽科の学習指導案を個人で作成する課題を出すにあたり、「三つの柱」に基づく学習指導案を作成するためのガイドライン(オリジナルの教材)を作成し、これを用いた反転授業を実施した。さらに、「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料 音楽」に基づく評価規準の設定の仕方を、オリジナルのプロセスクメント(オリジナルの教材)により解説した。

授業づくりについては、担当者が各領域分野のデモンストレーションを行った。そして、学習指導要領と指導の関連について、詳しく解説した。

グループで行う模擬授業については、課題とした個人で作成する学習指導案を持ち寄り、グループ内で模擬授業の内容を検討および学習指導案を再考し、模擬授業を実施した。実施後は、グループごとに実践を想定した総括（振り返り）を行った。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

「音楽」では、得手不得手関係なく音楽の学習活動に参加できる授業環境を整えたことから、活動を通して小学校音楽科の学習の本質（ただ演奏したり、音楽を聴いてただ感想を書いたりする＝音楽の学習ではない）について学ぶことができた。

また、ICTを活用した鑑賞授業に関する課題を設定したことで、〔共通事項〕の重要性について実践を通して学ぶことができた。この課題を通して、しばしば「ただ音楽を聴いて感想を書く」と思われることがある鑑賞の授業の意義について理解を深めることができた。

「音楽科教育法」においては、模擬授業実施に向けて行う一連の活動に全員が関わることによって、Plan（計画：個人での学習指導案の作成とグループ活動による再考）、Do（実行：模擬授業の実施）、Check（評価：学生間のディスカッションおよび担当教員によるフィードバックと、個人およびグループでの模擬授業の振り返り）、Action（改善：小学校での授業実践に繋がる改善事項の検討）、つまりは、授業内で行う学習活動を、現在、教育現場で求められている、PDCA サイクルによる授業改善につなげることで、実践的、かつ、協働的に音楽の授業づくりについて学ぶことができた。

5 今後の目標（これからどうするか）

特徴である少人数教育を活かし、45分間の模擬授業を実施できるようになった。一方で、模擬授業の内容については、実施前にさらに学生と検討を重ねる必要性を感じた。そのため、空き時間や teams を活用することで事前の打ち合わせの時間を充実させることで、模擬授業の質の向上を図る。

音あるいは音楽は本来、目で見えるではないが、ICT、とりわけパワーポイントを使って可視化できる要素もある。これを活用することで、学生の音楽的な知識・技能の習得を図るとともに、音楽科の授業で活用できるパワーポイントの使い方と効果を、大学での授業を介して実感できるよう、教材開発や授業改善をしていきたい。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- (1) 「振り返りシート」(非公開)
- (2) 「レジュメ」(非公開)
- (3) 「学生が演奏するソプラノリコーダーなどの音源」(非公開)
- (4) 「学生が作成する学習指導案」(非公開)

ティーチング・ポートフォリオ

松本 祐介

(記入日:2024年2月16日)

1 教育の責任(何をやっているか:担当科目)

体育科教育法(2年後期必修科目2単位)、健康スポーツ論(共通教育科目2単位)、スポーツ(3)(共通教育科目2単位)、スポーツ(5)(共通教育科目2単位)、スポーツ(6)(共通教育科目2単位)、情報通信技術の活用(共通教育科目2単位)

2 理念(なぜやっているか:教育目標)

児童教育学科の科目の場合は、教員になるために必要な知識及び技能を確実に身に付け、主体的・対話的で深い学びの実現のために学生同士の関わり合いを重視しながら、「より良い授業」を目指して学び合い高めていくことである。

共通教育科目では、スポーツや運動を肯定的に捉え、生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現するために、基本的な知識を身につけるとともに、主体的に「する、観る、支える、知るスポーツ」へと自らを繋げていけるようにすることである。

3 方法(どのようにやっているか:実践の工夫)

体育科教育法:この授業では、「良い体育授業」の実践を目指して、指導案の作成と模擬授業実践を中心に構成している。「良い体育授業」を目指し、半期15回の講義だけでなく、今後教員となり教壇に立つてからも成長していくために「反省的实践家」としての技量を高める必要がある。そこで、模擬授業では客観的データ(期間記録、言葉かけ回数、形成的授業評価)を示し、毎時間の省察を重視している。省察された内容は教師グループへ共有し、反省会にて改善点を考察する手立てとした。本年度もこれらのデータ全て Teams を活用して共有することで各個人の作業効率アップを図った。

情報通信技術の活用:Society5.0の概要、ICTの概要、AI(生成AI含む)の概要、最新の Tec 技術について内閣府などから発表されている動画を活用して理解を促した。その上で、教育現場での ICT 活用実践の現状から ICT 教育の未来までを考察した。技能として、Word・Excel・PowerPoint の使い方を教育現場で

活用できる事例（Word：学級だより、Excel：成績処理、PowerPoint：授業資料）を用いて演習した。また、Google ClassroomなどのLMSの演習も実施し、ICT活用の実践力も身につけた。さらに、授業で活用できる動画づくりを行い、一人ひとりアプリ等を用いながら動画編集し作成を試みた。

スポーツ科目：講義科目では、自身のスマートフォンやタブレットなどを使用した即時的なアンケート集計を活用し、様々な意見や経験を聞く機会を設けながら、学習を深めていった。実技科目では、主体的な活動を目指して、後半はグループ活動を主に、活動や練習もグループによるオリジナルで行い、試合運営も学生自身で行った。

4 成果(どうだったか:結果と評価)

健康スポーツ論においては、毎時間の小レポート及び最終レポートでの感想にて多くの学生から、スポーツに対する否定的な意見から肯定的な意見への変容やスポーツを捉える視点の変化がみられた（エビデンス1）。

その他の授業においても、学生による授業評価アンケートにて一定の高評価を得ることができた（エビデンス2）。

体育科教育法では、省察及び反省会での改善案を踏まえた指導案の修正を行い、全員が割り振られた学年・領域の指導案を完成させた（エビデンス3）。

6 エビデンスとなるもの(資料の種類などの名称)

- 1 リアクションペーパー(非公開)
- 2 学生による授業評価アンケート(非公開)
- 3 学生の作成した指導案(非公開)

ティーチング・ポートフォリオ

学科：児童教育 氏名：山口恭平

(記入日：2024年 2月 25日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

<2023年度>

- 「教職論」(児童1年前期 必修科目 2単位)
- 「児童教育基礎演習」(児童2年前期 必修科目 2単位、[9回分])
- 「教育課程論」(児童2年前期 選択必修科目 2単位)
- 「教育課程論」(幼児3年前期 選択必修科目 2単位)
- 「教育原理」(児童1年後期 必修科目 2単位)
- 「道徳の理論と指導法」(児童2年後期 選択必修科目 2単位)
- 「児童教育演習」(児童3年 通年 必修科目 4単位)
- 「教職実践演習」(児童4年後期 [3回分] 教職科目 2単位)
- 「教職実践演習」(史日心生4年後期 [柴田講師と共同で12回分] 教職科目 2単位)
- 「教職実践演習」(国際4年後期 [柴田講師と共同で12回分] 教職科目 2単位)
- 「川村学園と女子教育史」(史日心生2~4年後期 選択科目 2単位)
- 「卒業研究演習」(児童4年後期 必修科目 4単位)
- 「卒業研究」(児童4年 必修科目 2単位)

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

担当科目のほとんどが教職科目であるが、基本的に教育に対してさまざまな観点から物事を考えられるように心がけている。とくに教職科目では、将来教員となることを想定し、教育に関して柔軟な見方をとれるように、教育の原理的なところまで掘り下げながら、多面的多角的な視点から教育について考えることができる力を身につけることを目指している。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

- ・「教育原理」では、事前に配布したワークシートと資料を中心に学習を進めた。適宜映像の視聴などを取り入れ、ディスカッションなどによるアクティブラーニングを心がけた。
- ・「道徳の理論と指導法」では、最終目標を学習指導案の作成に定め、そこに向けて、道徳教育の目的論や発達の理論など理論的な話を授業の前半に配置し、後半をより実践的な授業論などでかため、学習指導案の作成へ向かえるように授業の流れを工夫した。
- ・「教育課程論」では、事前に配布したワークシートと資料を中心に授業を進めた。適宜、学生が個人やグループで授業内容を反芻しながら考察することが必要な課題を課し、学修効果を高めることを目指した。

・「児童教育基礎演習」では、アカデミックな文章を書くことに慣れることを目標に、学生が文献を集め、自ら構成して書くということを授業の中心に据えた。

・「教職実践演習」では、半年後には教壇に立つ学生が自らの教育実践を広い視野から捉えることができるように、実践的な教材においても理論を重視しながら授業を行った。

・「児童教育演習」「卒業研究演習」では、資料をもとにしたディスカッションを基本とした。心がけたことは、できる限り学生に話してもらい、教員としては要所要所で議論の方向付けをすることである。

・「川村学園と女子教育史」では、事前に配布した資料を中心に授業の前半でパワーポイントによる講義を行い、後半は学生が発展的な内容について考察することを求める課題を課すという方法をとった。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

・「教育原理」では、今年度は少人数であったが、楽しんで受講できているという応答があった。それは、授業において提出された課題においても見てとることができた（エビデンス1）。

・「道徳の理論と指導法」では、道徳に対する多角的な視点を強調したためか、道徳には正解がなく難しいと感じた学生も多く見られたが、道徳に対する多面的な視点を肯定しつつ、生徒を善へと導こうとする姿勢が学生が作成した学習指導案からもうかがえたので、授業の目標はおおむね達成できたと考える（エビデンス2）。

・「教育課程論」では、レポート等から、学生が授業内容について主体的に考察していることがうかがえた（エビデンス2）。

・「児童教育基礎演習」では、最後のプレゼンテーションに向けて、資料集め、論文の要約等を行ったが、それらのプロセスを経て作成されたプレゼンテーションは、各々の興味関心に従った質の高いものとなった。学生もまた、きちんと文献などを調べた上でそれらを多角的な視点でまとめていくというアカデミックな文章やプレゼンテーションの作成について得るものが多かったと考える（エビデンス3）。

・「児童教育演習」「卒業研究演習」では、今年度も、学生から主体的にディスカッションができるゼミを楽しんでいるという旨を伝えられた。学生が主体的に教育を深く考察しようとしているさまは、レポートや卒業研究に見られる課題設定からもうかがえる。特に「卒業研究演習」において、卒業研究の執筆に向けて懸命に文献と向かい合い葛藤する学生の姿には、教員として大いに励まされた（エビデンス1）。

・「川村学園と女子教育史」は、今年度は目白キャンパスで開講された一昨年とは異なり、少人数のゼミのような形式での開講となった。その分、学生の興味関心にも呼応して授業を柔軟に行うことができたと考えている。学生が授業内容について真摯に考えていることは、課題等からうかがえた（エビデンス1）。

5 今後の目標（これからどうするか）

来年度もまた、学生の理解度や興味関心、必要としていることに十分に配慮しつつ、より学修効果の高い教材や題材を用いるように授業改善につとめていく。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1. レポート・課題（非公開）
2. 道徳科学習指導案（非公開）
3. 2023年授業評価アンケート（前期・後期）（非公開）